

高田博士農民窮乏論の検討

南 亮 三 郎

一

私には今この一文を草せねばならぬといふ何等の積極的理由もない。それに高田博士は私にとつての辱知の舊師でこそあれ、みづから進んで盾をさかさに向けねばならぬといふ敵では元よりない。それにも拘らずこの筆をとるに至つたのは、實はやむをえない次の事情からである。

私は今やつと一つの長篇に最後のタッチを加へた。それは現下世界の農業恐慌に主題をとりながら、何故に農民が窮乏化せざるをえないか、何故に農村が荒廢への一路を辿らねばならぬかの、資本主義社會における必然性を併せ示さんとするにあつた。このために私は日本における農村問題一般に關する諸文献をも手の届く限り詮索したのであるが、その仕事の進むにつれて圖らずも私の眼に、特に興味をもつて現はれたのは高田保馬博士の一論文『農村の人として』（經濟往來、六年五月號所載、卷頭論文）であつた。ところで私はそれに對して、

右に謂ふた小論のなかで極く荒つばい批評を加へてしまつた。いや、筆のはづみで、博士の所論はてんでお話にならないとまで云ふてしまつた。が考へてみれば、ひとの所説、わけて舊師の所説をかくまでひどく取扱ふたのは、よしんば見る所を異にするとは云へ、その罪必ずや萬死に値するであらう。私はあらためて紙をのべ、委曲をつくして、何故にしかるかをより一層明白に記さねばならぬ。少くともそれは學者としての私の、當然にとらねばならない責務である。その文に用ゐられた粗野の言辭もかくて初めて寛恕されるであらうし、博士また胸をひらいて私の云ふところに耳傾けらるゝであらう。すなはち非禮を顧みずこの一文を綴つて博士の叱正を乞はんと欲する所以である。

そのうへ、もう一つ斷つておかねばならぬことは、こゝに問題とせらるゝ博士の論文が、その發表せられたる場所から考へても決して嚴密なる意味における博士の學術論文ではないことである。むしろそれは博士にとつて、やんごとなさ書きおろされたる隨筆であつたかも知れない。しかもその直接の眼界は博士が「生れた農村」——「家の數はだんだんにへつて現在僅かに十五戸」になつたといふ「小村」に限られてゐる。したがつてこゝから「生れた」この「小」論文を特にとりあげて批判の俎上に拉し來たることは、あるひは博士にとつて豫想されない迷惑であるかも知れない。だが博士自身は「此論文の趣旨」を目して、「農村の人として、農村と農業と農民との運命を考へ」るにあるとせらるゝのであり、また「此小村の運命を考へることはやがて、世界の經濟、日本の經濟における農業の意義、地位を考へることに外ならぬ」と冒頭されてゐるのであるから、

私はまづ安んじてこの論文に對することが出来ると思ふ。

それどころかこの論文は短いながらも含蓄が豊かであり、農村問題に關する博士の造詣の一端がはつきりと表明されてゐるやうに思はれる。特に博士が、近時における日本の米價低落をもつてすべて一時的の豐作に基づくとなす見解の誤謬を摘發し(五頁)、進みては世界の農業恐慌に論及し「これを單に一般的不景氣に伴ふ購買力の減少から説明しようとするのは狭い見方である」(六頁)と斷ぜらるゝ條下などは、私見の全く一致するところであつて、ひそかなる悦びをさへ禁じえない。がその所論の全根幹においては、私は不幸にして博士と思ふところを一にしえないのである。謂ふところの全根幹とは、一は農民窮乏の原因論であり、二はこれに基づいての農村對策論である。しかしてこれら二つの主題こそは相合して、博士所論の骨子をなしてゐるのである。以下項を分つてこれら二つの主題を中心に、忌憚なく博士の所論を解剖し批判し、それが理論的には到底致命的な暗礁に衝きあたらねばならない所以を論證するであらう。ただ私の論述が——標題それ自身もまた——最初意圖せられたる發表場所の關係から幾分の隨筆味を帶び來り、自由な氣持で時には勝手な雜言をはくに至るであらうことは、豫めゆるして頂かねばならない。

二

さて私はまづ、現下日本の差迫つた農村問題をひつさげ、農民の窮乏は何に由つて生じたかと博士に問ふて

みる。博士はさすがに農民窮乏の實情を、いま現にそこを見られつゝある「小村」について活々と描寫される。前には「その大半までは自作農であつた。三四十年の間、親の次には子、子の次には孫、代々正直に朝から晩まではたらいだ。而も今は、大抵は小作農として立つことになつてゐる。……正直にはたらいだて働きぬいて得たる結果は何か、世間並にも及ばぬくらしと、土地の喪失と、借金と。」「然らば社會は農村に何をして農村をかうしたか」(この云ひ廻しは原文通り)。博士たちどころに自からの問に答へて云はるゝやう、「事がらは極めて簡單である。一方に於ては自給性の喪失。他方に於て、生活標準の變化。これは資本主義生産の發達の兩側面と考へてもよい。更に此傾向に油を注いだものがある。それは農村負擔の重壓。而してこれは日本の政治と特別の關係をもつてゐる。」(前掲論文二頁、傍點みなみ、以下すべて同じ)

これによつて見ると、博士における農民窮乏の根本的原因是「自給性の喪失」と「生活標準の變化」との二つであり、それに「油を注いだ」ものとして「農村負擔の重壓」が副次的原因として掲げられてある。さうして前二者が「經濟の進み」、後の一者が「政治の動き」と表象されてゐる(二―三頁)。しかしてこの、副次的原因たる農村負擔の重壓をひき起さしめた「政治の動き」は、博士における農村對策の第三の道として最後に論ぜられてゐるので、私もまたこれを農民窮乏の原因論から一應ひき離して後段に取扱ふことゝし、こゝでは根本原因と見なされてゐる「經濟の進み」、すなはち農民の「自給性の喪失」と「生活標準の變化」とを批判の對象とし、便宜上まづ後者から始めることゝしよう。そこで私は改めて博士に向ひ、しからは農民の「生活

標準」はいま現にどうであり、またそれは如何に「變化」したかと訊ねかへさねばならぬ。

すると博士の答へはかうである——今日農村の生活は「人間らしき生活と云ふものまでには可なりの距離がある。私は數月間、都會の生活を見聞してから郷里にかへる、そして農村の人たちの生活を見る。これでも同一國家内の而も同一時代の生活であるかと思ふ。農民の生活は今日、受難そのものであるといつても之を言葉の綾と云ひ得るものはあるまい。けれども眼を轉ぜよ「！」。私共の此印象を離れて冷靜に「！」事實の變化そのものを直視して見る。農村の生活はこれでも過去三四十年間に著しく「！」高まつた、特に大戦争時の景氣以後に於てさうである。(四頁)

私自身はいま他の現實の事實に照して農民の生活程度が如何にあるか、いな一般に農民の窮乏は根柢的に何に由來するか、を積極的に説き出でようとはしない、それには近く別の機會がある。さしあたり博士の所論に對する決定的反駁は、博士の論述それ自からが引受けてくれる。博士によると「農村の生活は著しく高まつた」、しかしてこの「生活標準の變化」「生活の向上」が農民窮乏の二大原因の一である。しからばそれは、どんなに「高まつた」か。「世間並にも及ばぬくらし」に、「人間らしき生活と云ふものまでには可なりの距離がある」位に、そして「これでも同一國家内の而も同一時代の生活であるかと思ふ」位に！しかもその「生活」、その「くらし」が農民窮乏の原因だと云ふのである。「著しく高まつた」現在においてさへ「世間並にも及ばぬくらし」だとすれば、そしてそれが窮乏の原因だとすれば、農民は一體どんな「くらし」をすればよいの

か。生活標準を人間以下に——今でも人間らしき生活から「可なりの距離」があるのに、その距離をもつともつと大ならしめて——さうだ、おそらく犬畜生に近い「くらし」にまで引き下げたら、農民の窮乏はなくなる。とでも云はるゝのだらうか。（因みに云ふ、博士よ意を安んぜられよ、養蠶地方では農民は蠶のさなぎを食つてゐた、いま現に高知縣のある地方では飢えた農民は野生の狐のかみそりの根を掘つて喰つてゐる。）かういふ筋道のたゞぬ議論が一流の學者によつて説かれてゐるのであるから、埼玉縣の農民代表が大舉して首都にまで押しよせ來たり、かう叫んだのに無理はない——「我々農民の苦みのうめき聲は人に聞えぬでせうか。この苦惱煩悶の姿は人に見えぬでせうか。學者も政治家も實業家も新聞記者も國民の七割を占める我々農民の朝から晩まで働く失業者の苦悶と窮境を口にする人も書表す人もありません」ツて！ あへて私は博士に云ふ、今こそ「眼を轉」ぜられていかが？「生活標準の變化」はこの場合、一つの妄想でしかない。よしんばそれに若干の「向上」があつたとて、それは喜ばれ、すゝめられ、また助成せらるべきものでこそあれ、斷じて農民窮乏の原因などとして掲げらるべきものではない。農民がかくも「代々正直に朝から晩まではたらき」ながら、なほかつ「世間並にも及ばぬくらし」にとどまつてゐる間に、「大都會にゐる人たちの富はどれほど増加してゐることであらう」(二頁)かが、對比せられ、究明せらるべき根本問題であるのではないか。だから私は續けて博士に云ひたい、この妄想から早く「離れて冷靜に事實」そのものを「直視」し、迫り來たる農民の叫びに虚心の耳傾けらるゝがよい。

次いで私は、博士における農民窮乏の他の原因「自給性の喪失」を顧みる。問題はかゝつて、農村におけるこの自給性の喪失は何に由来するかにある。「明治の前半期までは私の小村に於ても——と博士は、再びこの小村の實情に徴して論ぜらるゝ——殆ど完全なる自給が行はれてゐた。……衣服、履物、食物の一切、燈火、燃料、盡く自給せられざるものはなかつた。然るに、資本主義生産の進行は漸次にこれらの自給せられたる生産物を都會の工場から農村に輸入するやうになつた」(三頁)。そこまでは私もついてゆく、が問題はそれに續く次の言葉である——「それは値段の問題よりもむしろ外觀の、體裁の問題である。手づくりの恰好のわるい田舎らしい品物は盡くすてられた。」(三頁)

農村における自給性の喪失が「外觀の、體裁の問題」？さう片づけてしまへば、またしまひうるならば、なるほど「事がらは極めて簡單」である。「資本主義生産の進行」も何もあつたものではない。「外觀の、體裁の問題」を離れて「手づくりの恰好のわるい、田舎らしい品物」で辛抱しさえすれば——さうして事實農民にとつてそんな辛抱くらゐなんでもない——謂ふところ農村問題など、たちどころに消え去つてしまふ筈である。「私の小村」はこれで救はれましょう、そこに住む善良な農民たちはこの説に満足もしよう。が、博士よ待つてください、「資本主義生産の進行」がそれを許さぬのである。

こゝにあらためて論ずるまでもなく、都市に發展する「資本主義生産」は農村における「自給性の喪失」に對して決定的である。今までは農耕のかたはら農民自から作りつゝあつた生活必需品の主要部分も、また彼等が細い生活の助けとしてわづかに營みえた農民的家内工業も、ひとたび資本が都市に累積してその本來の作用を開始するに至るや、それらは徐々に或は急激に壓倒せられ・驅逐せられ・收奪せられて、農民はつひに、ただ特定の農業生産物をのみ市場を目當てに生産せねばならない別個の存在となつてしまふ。これは舊來の意味における——博士の言葉をもつて表現すれば「殆ど完全なる自給が行はれてゐた」ところの農民的存在に對する・根本的な變革を意味する。しかもこの變革を不可避ならしめ・農民の手からその副的家内工業を奪ひとつたものは、都市における「資本主義生産」そのものである。その力は強暴であり・その及ぶ範圍は全國的であつて、わづかに十五戸の博士の「小村」をも假借しない。そこには微塵ほども——語調を強めて私はさう云ふ——農民の側における「外觀」や「體裁」の問題がはたらきえない。否、この「外觀」この「體裁」をもつて——さうだ、博士自身の言葉をもつて云へば「恐らく停車場から、列車から、而して次には婦人雜誌から、新聞から、農村に入りこむところの刺激」(四頁)をもとほして、農民の手から「手づくりの恰好のわるい、田舎らしい品物」を悉く捨て去らしむることそれ自體が、「資本主義生産」そのものゝ魔力でもある。「資本主義生産」による農民的家内工業の決定的驅逐、しかり農民の完全なる「自給性の喪失」はかくて、せきとめがたい力をもつて猛進を續ける資本主義社會の必然性——動かしがたい「經濟の進み」である。眼點をこゝに移さず

して、しかもなほかつそれは「外觀」だ「體裁」だなどと説くものは、資本主義社會におけるこの必然性を理解し得ざるか・或は事實の真相に眼を蔽ふてことさらに理解せざるものと評せねばならぬ。

が吾々の博士にんでこの理がわからぬ筈があらう。博士が「農業生産の爲の労働がしきりに他の都會の工業の生産物によりて取代られつゝある」事實(四頁)、および日本の生産物價格が世界の農産物における生産増加によつて終局的な壓迫を受くべき所以(五―六頁)を説いたあとで次のやうに論斷せらるゝとき——「謂ふに、今日の農村の苦悶も大觀すれば、即ち世界の産業を通して見れば機械が労働を驅逐せむとする傾向の一の表現に過ぎない。ある意味に於てそれは不可抗の勢力の作用である。」(六頁)——それはまさしく、私の云はんとしたところを、部分的にもせよすでに表明したものである。謂ふところの「農村の苦悶」がかくてもし今日の經濟組織のもとにおける「不可抗の勢力の作用」と解せらるゝならば、何故に博士は、この「勢力の作用」の一面と解せらるべき・資本主義的工業生産物の農村への壓迫的進入を目して「外觀の、體裁の問題」であると斷ぜらるゝか、私不敏にして到底その理由を見出し得ないのである。事の真相にすでに重大なる一觸を與へられながら、しかもこれとは全く矛盾するとしか思はれない言詮をなさるゝは、ことさらに事實を歪曲したと評せられても仕方あるまい。こゝに想ひ起さるゝはカウツキーの言葉である——「だが資本は工業の上のみのその作用を極限しない、充分に強力となるやそれは農業をもまた捲き込む」(農業問題、スツットガルト一八九九年、一三頁)。私はかりに(以上の論點が博士によつて解明せらるゝを得、疑問とするところが氷然と解け去る

まで)カウツキの言葉につけたして次の如くに云ふ——「だが資本は工業と農業との上にもその作用を極限しない、更に一層強力となるやそれは經濟學者をもまた捲き込む！」

四

以上吾々は、高田博士が説かるゝ農民窮乏の原因が何であり・その所論が如何に致命的な缺陷を包藏してゐるかを見た。吾々は進んで、かやうなる原因論の上にたてられた農村對策の如何なる正體であるかを見究めねばならぬ。

ところで博士がこの農村對策を論ずる部分において、「農村が行き得る道は如何」として掲げられたものは、分つて三つとなす。「農村没落への道」がその一、「農村をして自ら立たしむる道」がその二、しかして「政治の道」がその三である。が、これら三つの道のうち最初のもは「まさしく今日の農村が急ぎつゝある進路である。今日のまゝに放任せらるゝ限り、農村は没落の外に行くところがない」(七頁)とせらるゝものであつて、もとより博士自身が好んで提唱されるものではない。ただ博士がこれに續いて、「併しながら、農村の没落は幾千萬の農村人口の著しき部分の生活不能を意味する、それは日本の没落を意味することになりはしないか。此道は引きかへすより外に致し方がないはずである」(同頁)と云はれるとき、こゝに一つの問題が生ずる。如何にしてこの道を引きかへすか・また果して引きかへしうるか、といふこと。これに對する博士の回答

はおのづからその農村對策に見出されねばならぬ。すると博士がこの没落の道より農村を救ひ出さんとして主張される農村對策は、残るところの二道——「農村をして自ら立たしむる道」と「政治の道」である。よつて私はこの部分における批判の重點をこの二道に置く。なぜならば、この二道が検討されて初めて吾々は、博士がもつて「引きかへすより外に致し方がないはず」とされた「没落への道」から果してよく理論的に引きかへし得られたかどうか、また引きかへさんとする熱意はこれをもちながら所詮その理論は抗しがたき暗礁にぶつかつて期せずして農村と共に「没落への道」を急ぎつゝあるのではないかどうか——についての終局的判定を下しうるであらうから。

そこで先づ第一に吟味(吾々はこの用語をも博士に負ふてゐる)さるべきは「農村をして自ら立たしむる道」であるが、博士はこれを二つの方向に區別し、謂ゆる農業の多角的經營——日本農業のオランダ化をその一つに屬せしめて、その到底行はれがたき所以を論じ、進んで第二の方向として農村の「自給性の恢復」を主張されてゐる。吾々が前に見たやうに、博士における農民窮乏の一大原因はその「自給性の喪失」であつたが、今これに基づいて博士が主張されようとする農村の根本對策がおのづから、喪はれたるこの「自給性の恢復」となつて現はれることは不思議でなからう。尤も次に引用せんとする章句の末尾では、博士はこの自給性の恢復をもつて「至難の事」とし、「十分の望をつなぎ得ない」とまで附言して居らるゝが、しかもそれが如何に根本的な——それに比しては如何なる他の方策も無力とさへ思はるゝほど重要な對策と考へられてゐるかは、次の

言葉で明白である。曰く「私の見る所によれば、農村の確實に自力を以て生き得る道はたゞ次のものよりない。本來自給性の喪失によりて行きつまれる農村である。之をして間違ひなく立直らしめる道は自給性の恢復に外ならぬ。もとよりこれは社會の進行を逆轉せしむることである。ではあるけれども、農村を維持し發展せしめようとするならばこれより外に道はない」と(八頁)。しからば如何にして？ 博士説きて農民に教へらるゝやう——「農村が自ら使用するものは之を自ら作る、なるべく自ら作るものだけを使用する。なるべく多くを賣れ、而して買ふな。これのみが農村を生かし得るであらう。」(同上)

これに對する私の批判の第一點。まづ「農村が自ら使用するものは之を自ら作る」？それは如何にして可能であるか。衣服、履物、味噌、醬油、鹽、砂糖、酒、煙草、等々々々？ それらの殆んどすべてが既に資本主義生産の支配下に拉し去られたこと、及びこの勢ひは今日の社會においてはむしろ避けがたき必然であること——したがつて如何に言を繰返へして農民に説くとするもそれは所詮「社會の進行を逆轉」せんとする憐れむべきシシファスの努力に終るの外なきこと——は、前段において私の縷述したところで明かであるが、よしんばこの抗しがたき資本主義社會の必然性を認めざるものでも、一見して博士所論の背理に氣づくであらう。何故に背理と云ふ？ それはかうである。

謂ふところの「資本主義生産の進行」が、かりに「外觀の、體裁の問題」だとしても、そしてそれさへ辛抱すれば農村の自給性は「恢復」するとしても、鹽や、酒や、煙草はどうしてくれる？ これも「自給」せよと云

はるゝか。事實したくつてもお上が許してくれぬではないか。それとも酒は農民に贅澤と云はるゝか、煙草は農民にのむなと云はるゝか。次いでは「衣服、履物、燈火」。衣服だつて自から作るには棉がいる、機がいる。履物だつて用材がいる、毛皮がいる、道具がいる。燈火は電燈を廢してランプを持ち出して來ても、石油は自分で掘り出しては來られまい。たとひ、これらをどうにか調達するとしても、その勞力はどうする？ 田を耕すことをやめて自分で作れとでも云はるゝか。博士自からもその「近村で一代にして十町の田地を買ひためた人」の「言語に絶」したその働き方を述べて、「朝、暗いうちから田の仕事に出るのは云ふまでもない、日くれども仕事は全く出來ぬやうにならぬ限りはかへらない。天氣のよい日には、足を洗つた事がない、かへるとすぐ食事をとつて土足のまゝ床の中に入る。……生産費も得られない産業に於て金をまうけるには、これだけの努力を要する」(七頁)と云ふて居られるではないか。その農民に——朝から晩まで働いても働ききれないその農民に、衣服は自分で・履物は自分で・燈火は自分で、いなすべて「自ら使用するものは之を自ら作れ」とでも云はるゝのか。その所説こそはまことに「言語に絶してゐる」!

次に第二點。「なるべく多くを賣れ、而して買ふな」？ それはまた理論的に・事實的に、如何にして可能であるか。想ひ起す、十八世紀中葉の物のわかつた人は「なるべく多くを買へ、而してより多くを賣れ」と云ふた。それならばわかつてゐる。が、「多くを賣れ、而して買ふな」？

農民が本來自己消費のためのその生産物を「賣り」出し始めたのは、資本主義社會においては不可缺とされ

て來た貨幣獲得の必要からである。この必要は先づ國家に對する租税の金納から起つたが、さらにこれと共に或はこれ以上に強暴に迫り來つた必要は、その手から驅逐され始めたところの・しかして今は資本主義生産の支配下に造出されるところの工業生産物を「買ひ」入れねばならぬことから起つた。したがつて農民がその農業生産物を「賣る」のは、わづかながらも必要不可欠な工業生産物を「買ふ」ためであつた。こゝでもまた農民の立場は、發動的・自由選擇的ではあり得ずして、むしろ受動的・強制的である。云ひかへれば、都市に發展する商工資本主義が先づ農民の手からその家内工業を驅逐し・收奪し、さうして農民の間に資本主義生産を自身維持發展のための國內市場を擴大しゆくのである。それ故に私の解する資本主義生産の理論の上からは、農民にとつては「買は」ねばならぬことがさきで「賣ら」ねばならぬことがあとである。農民が「買ふ」ことなくして「賣り」うらと思ふものは、資本主義生産のこの理論をまともに見るを得ざるものと評せねばならぬ。

だが博士の所説はそのうへ、事實的にかういふ暗礁に乗りあげざるを得ない。すなはち「多くを賣る」ためには農民は先づより多くを作らねばならぬ、しかして多くを作る爲には——他の條件たとへば耕作の土地面積や施肥や農具は同じだとしても、農民はより多く働かねばならぬ。賣るために多く働いて、しかも「自ら使用するものは之を自ら作る」！農民にとつては、しかり没落しゆく農村を救ふてもらふためには、それはなんとありがたい「自給性の恢復」であることか。私はいま、より「多くを賣る」ためにより多くを作る結果とし

て當然に期せらるべき農業生産物の増加が、その價格の上に如何に新たな重壓を加ふるに至るべきかは措いて問はない。ただ博士の所説を貫いてゆけば事實において、如何に不條理な歸結に導かざるを得ないかを示せば足りる。ただしその數、幾千萬をこゆる多數の農民のことであるから、中には一人や二人の殊勝な心がけの人があつて、高田博士のこの「自給性の恢復」論に耳をかして隨喜の涙を流さぬとは私も保證しない。がその場合の農民の働きこそ「言語に絶する」であらう。「肺病患者に勞役を強ふるに等しい」(九頁)とは、まさに博士の根本的な、自給性の恢復による農村對策への適評であらねばならぬ。博士の別の言葉はいふてゐる——
「せめて此肺患者をして勞役から免れしめよ！」

五

「残る道はただ一である」と博士は、いよいよ最後の切り札を投げ出される。今こそ吾々は博士の、如上の論述から受けとつた「印象を離れて冷靜に」、その最後の道の何であるかを「直視」せねばならぬ。そこで博士は續いて云はれる——「それはもはや經濟の道ではない、政治の道である」(九頁)。經濟を離れて政治の道とは？ 博士の答は一見、直裁簡明である。曰く「第一步として先づ農村をして都會と同一なる公課の負擔を擔はしめよ。更に進みて、都會の餘剩「！」を以て農村の營養を補給「！」せよ。これ以外に農村の救はるゝ道はない」(九頁)。

ところでこの提案は、見らるゝ通り二つの部分から成立つてゐる。その前半——博士の謂ゆる「第一步」がたしかに「政治の道」であり、しかも農村が「今日經濟的に行きつまりつゝあるところに、公課過重の重壓がある」の事實を認めるものは、なんびとと云へども博士の提案に賛意を表するであらう。それどころか農村における公課の過重負擔は、もう何年も前から世人の前に明かな事實として示されてゐた。が私はそんなことをこゝで詮議するほどの物好きも持ち合せてゐないし、またこの財政組織の部分的改革によつて農村負擔の軽減をはかることが果して根本的な救濟策たりうるかどうか——詳しく云ふならば、博士における農民窮乏の根本原因が「自給性の喪失」と「生活標準の變化」とにあり、「農村負擔の重壓」はそれに對して「油を注」ぐ底の謂はゞ副次的第二次的原因であつたに拘らず、その根本原因に對しては遂に何等の手段をも講じ得ずして、この第二次的原因のみを漸く「政治の道」によつて緩和することがやがて唯一無二の根本的救濟策であり「これ以外に農村の救はるゝ道はない」とまで云ひ切りうるかどうか、の詮索も私はこゝで試みようとはしない。この場合の私の問題は、謂ふところの「政治の道」の第二段にかゝはる。

「更に進みて、都會の餘剰を以て農村の營養を補給せよ」？ この場合謂ふところの「都會の餘剰」が一體何であるかは、博士の論述を通して全く不明であるが、まさか都會の餘りものでも呉れてやれとふ意ではあるまい。それとも金を融通せよといふ意であるか。さうならば金はある、しかも高い利子の金が。さうしてそれますます／＼農村を搾取し農民大衆を債務奴隸にまでひきづつて行くのではないか。この理は農民自身がすでに知

りつくしてゐる、だからその聲の一つは云ふ——「政府は近時、農村救済をやかましく言ふて居るとの事だ、が地主の政府に何が出来る。農村に金を貸し付けて救済すると言ふ。そんな事で此の俺達を救ふ事が出来るものか、……我等に金を貸し付けて、税金を拂へと言ふのだらう、小學校教員の減俸を行ふなど言ふのだらう。そんなものが何になる、——それでさへ俺達は、借金に悩み續けてゐるのではないか、もうこれ以上そんな重荷は負ひ度くないのだ」(中央公論、五年十月號所載、農村生活者の手記より)。餘談は差控へて、謂ふところの「都會の餘剰」に對し今一つ與へうる解釋を考へてみる。すると前に出て來る言葉に「目ざすところは商工業の利潤にある」とあるから、或はそれを意味してゐるのかも知れない。だが、もしさうだとすれば問題はこゝに一轉して、その「都會の餘剰」「商工業の利潤」は全體として、そもそも何を條件とし・また如何にして成立するか、といふことになる。

「都會の餘剰」「商工業の利潤」がもし吾々の農村から無關係に成立するものであるならば、これをもつて「農村の營養を補給」すること必ずしも意味なしとしないであらう。が一般に、「以て補給せよ」と云はるゝその「都會の餘剰」こそは、實は「農村の營養」を犠牲にして——詳言すれば、一方には農村から都會への・等價物なしの不斷の價值流入により、他方には農村と都會との間における・農業生産物と工業生産物との不斷の交換關係を通じて成立するものではないか。尤もこの第二の・農村都會間における交換關係は、尠なからぬ日本の論者が主張するところとは反對に、そのまゝ都會による農村の經濟的搾取を意味するものではない。が事實

においてはこの交換関係もまた前者と同じやうに——カウツキーの用語をもつて云へば「農村の素材的搾取」
「營養素材における土地の疲弊」（農業問題、スツットガルト一八九九年、二二頁）を意味するのである。かやうに
にして「都會の餘剰」「商工業の利潤」は、それがかゝるものとして成立しうるためには到底、農村の恆久的疲
弊・農民の慢性的窮乏化を不可缺の前提とせざるを得ない。以つて農村に營養を「補給」せんとすればするほ
ど、しかしてそのために都會の「餘剰」「利潤」を大ならしめんとすればするほど、農村はますます搾取されて
ゆかねばならぬ理ではないか。吾々はこゝに、資本主義體制そのものを前提とする如何なる農村對策も終局的
に衡きあたらねばならない理論的矛盾を見出すのである。

かさねて問ふ、「都會の餘剰を以て農村の營養を補給せよ」？ 言葉にはたしかに、慨世的な熱意と麻酔的な
魅力が秘められてある。が、いかなる熱意も・いかなる魅力も、その據つて立つ理論の破綻には抗し得ないで
あらう。「着眼こゝに及ばざる識者の見方は——と吾々の高田博士は、つひに世の農村問題研究家を叱咤して
云ふて居られる——すべて商工資本家的利害に囚はれたるものであると云ひたい」（同九頁）。私は不幸にして、
これに一語の修正をも加ふことなく、わづかに傍點を加へただけで、そつくりそのまゝ博士所論に對する評
言とせねばならぬのをかなしむ。

以上私は高田博士における農民窮乏の原因論を批判し、進みてその農村對策論の検討を了へて、こゝにやつと、宣下を待つべき終局的判定の前に到着した。「引きかへすより外に致し方がないはず」とされた「農村没落への道」から博士の所説は果してよく理論的に引きかへし得たかどうか、或は同じことであるが、引きかへさんとする熱意はこれをもたれながら所詮その理論は抗しがたき暗礁にぶつかつて、期せずして農村と共に没落への一途を急がねばならぬのではないかどうか、——ただしその判定は一に讀者諸君の自由にゆだねるとしよう。

× × × × ×

終りに、理解のいたらずして徒らに博士の高論を傷つけたるなきやを虞れ、あはせて、文辭粗雜、用語また甚だしく粗暴、先進學者への非禮を謹みて陳謝する。

(一九三一・九・二)

